

マラン大学プログラム

2019年8月14日～27日



編集委員名：津留崎豊 平田隆聖

プログラム概要

【期間】2019年8月14日～8月27日（14日間）

【留学先】国立マラン大学(Universitas Negeri Malang)

【内容】初日はインドネシアの食べ物に挑戦したり、マランの観光名所に訪れたりした。UMiCampでは他国の参加者とインドネシアの歴史や文化について学んだ。最終日はマラン大学の学生とお互いの国や大学についてのプレゼンテーションを行った。

マラン大学について

国立マラン大学は1954年に教員養成大学として設立された総合大学である。教育学、文学、数学、物理学、工学、スポーツ科学、社会科学、心理学、経済学の9つの学部があり、約33000人の学生が在籍している

UMiCamp

1週間の間、他国の参加者とインドネシアの歴史や文化に触れた。1週間で体験したことが書ききれない程おおいため、一部紹介させてもらう。主なものとしては大学の見学ツアー、独立記念式典、バティックの制作、プロモ山登山、ホームステイなどである。

大学の見学ツアーでは様々な学部の棟を見せてもらい学部の特色について説明していただいた。また、物理学部の場所では実験も見ていただいた。インドネシアでは丁度この時期は独立記念日の時期だったので式典に出席させていただいた。また、色々なところで祭りがお行われていた。

インドネシアの伝統的な染め物であるバティックを作成する体験もさせていただきました。プロモ山登山では山のふもとまで車で行き、斜面やものすごい数の階段を上って山頂につきました。ホームステイでは、2人、または3人に分かれてホストファミリーの家に泊まらせていただきました。家族との交流やインドネシアの伝統料理を振舞っていただいた。

インドネシアでの生活

交通手段

私たちはオンラインタクシーというものを利用した。日本でタクシーというと高く、利用しにくい印象があるが料金は日本の半分くらいで利用しやすかった。私

たちは利用することができなかったが、現地の人々の大半はバイクに乗っていた2人乗りは当たり前でそれ以上乗っているものも見かけて大変驚いた。多くの学生がバイクで大学に通っていた。佐賀大学では多くの自転車が駐輪してあるがそれがすべてバイクに変わったという状態であった。

住環境

基本的にトイレにトイレットペーパーはなく、水が溜めてあり桶を使って流すというものであった。お風呂もシャワーがあるところもあるが基本的には水が溜めてありお湯はなかった。気温は日本ほど高くはなく湿度も低い。夜になると涼しく、乾季であったため雨も降らず過ごしやすい気候であった。

食事

食事の面では、日本とは違った面も多かった。まず一つ目はインドネシアのお茶がとても甘いことである。日本のものに比べるとかなり甘いと感じたが、これがインドネシアでは一般的なのだそう。次に、ほとんどの食べ物が辛かったことである。香辛料が別についていて調整が可能なものもあったが、元々辛い物も多かった。現地の人に聞いてもこれくらいは普通だという風に言っていた。主食はコメであり、おかずは魚や鶏肉、大豆などがあつた。スープや麺類なども頻繁に出てきて日本人にも合う味付けも多かった。食事に使う道具はスプーンとフォークが基本であったが、独立記念日に食べた伝統料理は手でいただいた。

まとめ

今回参加したマラン大学プログラムでは、日本ではすることのできない貴重な体験を数多くすることができました。現地の人との触れ合いの中でインドネシアの文化を学ぶことができただけでなく、UMiCampでは様々な国から集まった参加者たちと英語でコミュニケーションをとることによって自分のスピーキングの能力を向上させることもでき、インドネシア以外の国の文化についても知ることができました。さらには普段と違う環境での生活に適応する力や英語でプレゼンテーションをする力も身についたと思います。

「特別な体験」

経済学部経営学科 1年 江田友信

私が SUSAP のインドネシアで行われるマラン大学プログラムを選んだ理由は、多くの国々の人々が同じ場所に集まるからです。2週間という決して長くはない時間の中で一度に多くのことを吸収できるだろうという期待となん十か国もの人々と生活できる体験など今後はないだろうと思い留学に行くことを決意しました。語学力に関しては私自身あまりありませんが、一生に一度のことだと思い、思い切って SUSAP に応募しました。

今回インドネシアへの初めての留学は、私にとって初めての海外渡航でもありました。留学に行く前は日本では考えられないようなことが起こるのかなと想像して楽しみな部分もありましたが、日本以外で生活することや周りの人が英語で会話することなども同じく想像して不安な日々を過ごしていました。しかしいざ参加してみると心躍るような毎日でした。大学生として初めての夏休みにマラン大学プログラムに参加してみて、やはり日本には感じられなかったことを体験できたので本当に参加してよかったと思っています。宗教のことや、食べ物、生活、ふるまい方など驚くこと、学んだことが多くありました。

私は留学中に忘れられなかった出来事がありました。それはイスラム教の女の人とホテルで同じ部屋になった時の出来事です。その方は普段、頭にベールを被っていました。部屋に戻ってきたときにその方はベールを脱いでいる状態でしたが、部屋のドアがロックされたので私は普段通りドアを開けようとしてしまいました。しかしそこで wait!wait! と言われました。最初はなぜそんなことを言われたのかがすぐに私にはわかりませんでした。その方が急いでベールを被っている姿を見て家族以外の男性には普段隠している部分を見せてはいけないことを思い出しました。日本にいるときにはベールを被っている人が近くにいなかったためドアを開けるときに気を付けようとは全く考えるこ

とがなく何も考えずにドアを開けてしまいました。今では、異文化の人と生活を共にしているのに私は相手のことを考えるということが不足していたなと感じます。この時はそんなに大事にはなりませんでしたが、大事になることもあり得ると私は考えるので改めて自分が持っている知識や、行動を考えなおすきっかけになりました。今回の件だけでなく国際社会また日本国内でも相手のことを知らないで起こる問題が多くありますし、また今後も出てくると思います。そこで私は事前に正確な知識をつけておくこと、相手のことを知ることそして常に相手のことを考えることが大事だと考えました。やはりこれらのためにはコミュニケーションはこれからも必要不可欠であるという結論に至りました。また、異国の人とのコミュニケーションをとるためにも語学力も大切な要素であると感じています。

マラン大学が主催するプログラムに参加していた外国の方たちは、母国語が英語でないにも関わらずみんな英語が堪能で母国語のように話しているのを聞いて衝撃を受けました。英語をあまり使わない場面、例えば海で遊んだり、ダンスをしたりといったことでは外国の人とも一緒に楽しむことができました。しかし私が英語を聞き取れなかったり、しゃべれなかったりしたので普通の会話すらままならなかったのが今、後悔として残っています。私は学校で英語を習ってきたはずなのに何をしてきたのだろうと本気で思いました。初めのほうは、周りの人も私が英語を喋れると思って早い英語で話しかけてきました。しかし私が全く聞き取れずにいると呆れられてしまうことも何回もありました。その時私は悔しい思いをしました。絶対に英語を話せるようになりたいと強く思いました。その後、私が英語を少ししか話せないのを知るとゆっくりとした英語を話してくれるようになり、何とか少しの会話をすることができました。拙い英語でしたが、英語を使って英語で会話するという体験ができて嬉しかったです。日本に興味を持ってくれている外国の人とは何回も

話しましたが、それ以外の人とはなかなか話せず
もっと英語喋れたらさらに楽しく意味のある留学
になっただろうと留学中に何度ももどかしい気持
ちになりました。二度と同じ思いを抱かないよう
に日本でもしっかりと英語の勉強をしてインドネ
シアでの経験を次につなげていこうと思います。

インドネシアへの留学は今までにない体験がで
きて興味深く、楽しいものであった反面私の未熟
さを思い知らされるものでした。日本人をサポート
してくれるインドネシア人にたくさん助けられま
した。山を越えて海に行き砂浜で寝たり、村を
訪問してそこでホームステイしたり、毎日ダンス
を踊ったり、英語を使って会話したり楽しい日々
でした。きっといつまでも忘れられない思い出が
できたと思います。そして、母国語が違う外国の
人たち同士で英語を使って楽しそうに話してい
るのを見ると私もあのようになりたいと強く思
いました。また、日本人のようにもじもじしてい
る人はほとんど見かけずみんな堂々としてい
る姿を見た時も同じ思いを抱きました。自分の主張
ははっきり言う人が多かったと感じました。

今回の留学によって語学力が伸びたかは定か
ではありませんが、英語を本気で勉強したいとい
う気持ちの変化は確実にありました。高校までの私
であれば留学に行かずに日本でだらだら過
ごしていたと思います。一歩踏み出したこと
でこんなに素晴らしい体験ができ、得るもの
がありました。一歩踏み出すことの大切さを
身に染みて感じます。これからもインドネ
シアであったこと、感じたことを忘れず
に日本の中でも自分のできることを精一杯
していきます。



プログラム参加者でプロモ登山

「インドネシアの生活を経験して」 理工学研究科理工学専攻 1年 宗 智里

私はマラン大学プログラムに参加して、もっと英
語のコミュニケーション能力をつけ、思ったことや
感じたことを英語を通して伝えたいと更に思うよ
うになりました。

このプログラムは、30 カ国以上の人が集まり、
様々なイベントや課題と一緒に取り組むことで、イ
ンドネシアの文化や生活を学び、他国の人とのつな
がり深めることのできるプログラムでした。

私は、このプログラムに参加する前、もっと英語
力をあげて、海外の論文を読んだり、国際学会や海
外の研究者と対等に意見交換ができるようになり
たいと考えていました。しかし、私には、英語力が
全くなく、英語でコミュニケーションを行う自信が
ないため外国人と話したくても、話す勇気がありま
せんでした。そんな自分を変えたい、少しでもコミ
ュニケーション能力をつけたいと思いこのプログ
ラムに参加しました。

このプログラムの海外の参加者は、英語力はもち
ろん、コミュニケーション力が、非常に高く、どん
なことにも自分から挑戦する姿勢に、はじめの方は
圧倒されてしまいました。私は、なかなか、前に出
ることができず、言われたことをただ後ろからこな
すだけで、自己主張もせず、リーダーシップをと
ることもできていませんでした。それでもインドネ
シア人チューターや参加者が輪に入れようとしてく
れたり、話しかけてきてくれたので、少しずつ打ち
解けることができました。しかし、このまま一方的
に来てもらって、自分から行動を起こさなければ、
参加した意味がないと感じるようになりました。そ
こで、自分の中で“今日はこの人にこういうことを
聞こう”と目標を決め取り組むようにしました。話
す前は相手に伝わるか、英語が下手すぎて呆れられ
ないか、など不安を感じていましたが、相手は聞き
取ろうとしてくれたり、わかりやすい英語で話して
くれたり、私の中の不安や心配から、もっと聞きた
い、もっと伝えたいと思うようになりました。この

2週間の留学で、ほんの少し英語での会話力がついたらけれど、英語力が大幅に伸びてはないと思います。しかし、この留学を通して、昔は大きな言葉の壁を自分で作って、様々な価値観のある人とのコミュニケーションのチャンスを自分から逃していたのだと感じました。たとえ、英語力がなくても、伝えようとする姿勢がなければ伝わらなく、コミュニケーション力が見つからないままで終わってしまうのだと思いました。これからは、単語や文法力を付けるだけでなく、正しい英語を意識して話すのではなく、多くのコミュニケーションを通して会話力を身に付けていきたいです。

また、全校集会中のインドネシアの高校生の前に立って、話す機会がありました。その時、日本の学生の雰囲気が全く違うことに驚きました。どちらかと言ったら日本の学生は、静かに先生の話聞きくという感じですが、インドネシアの学生は、みんなで集会を作り、学生も積極的に参加する雰囲気があり、前に立っている私達が圧倒されてしまいました。積極的にどんなことにも取り組む姿勢はこういった集会から日本と違っていると思いました。

また、インドネシアの人は心配りや、思いやりに溢れていると感じました。私が、なかなかみんなと溶け込めない時は、気にかけて声をかけてくれたり、不安に感じている時は、そっと励ましてくれたり、私達や参加者の想いをくみ取って、動いてくれたりなど、まだまだ挙げられないぐらい沢山の優しさや気遣いを感じました。日本人以上に明るくて、親切で、思いやりに溢れる国民性だと思いました。他にも、インドネシアで特に驚いたことは、交通状況です。車の両サイドを二人乗りのバイクが何台も通り抜けてたり、車線関係なく走っていく車があったり、交差点に信号がないため、人が車の流れを止める仕事をしていたり当たり前でした。更に、村の方では、小中学生ぐらいの子供がバイクを運転しており、目を疑いました。

この留学を通して、英語だけでなく非常に様々なことを学ぶことが出来ました。この経験は、貴重であり、様々な面で次に、つなげていきたいです。



全校集会に参加させて頂いたときの様子

「二週間での学び」

教育学部 2年 山上英絵

私は、インドネシアのマラン大学プログラムに参加した。この二週間は今まで生きてきた中で一番濃い二週間になった気がする。

今回の留学を通して、このプログラムに参加しなければできなかったことをたくさん経験することができた。私が一番衝撃を受けたのはトイレである。インドネシアのトイレはトイレットペーパーを置いてないところが多く、自分で持っていかなければならいけなかった。また、場所によっては自分でバケツに入っている水を汲んで流さなければならいところや靴を脱がなければならいところもあり、日本との違いに驚いた。また、インドネシアの独立記念日に初めて料理を右手で食べた。日本と違い、ご飯がパラパラしていたため、つかむのが難しく、口に運ぶのに時間がかかった。それでも、みんなで料理を囲んで手で食べることにより、食材をより感じる事ができた。インドネシアでの生活は日本とかけ離れていることばかりで戸惑うこともあったが、毎日初めての経験でわくわくしながら生活できた。

初めの一週間は UMiCamp に参加し、様々な国の人たちと交流をすることができた。初日から他の国の人たちの英語力に圧倒された。聞こえてくる英語は何となくしか理解できないし、話す人によっては全く聞き取れない。相手の言いたいことを予想し

ながら聞いたり、自分の言いたいことを英語に変えたりするのに精一杯だった。ホテルの部屋も他国の人と三人部屋で、日本語がわかる人がいないというだけで不安でいっぱいだったが、このプログラムに参加した意味を思い出して積極的に話すことを心掛けた。初日は気を遣ってばかりであり話すことができなかったが、二日目、ホテルの部屋に帰ってルームメイトの一人とお互いの国の菓子や料理を食べながらお互いの国のことなどの話をした。私はそのとき、気になっていたことを尋ねてみた。それは、なぜその子の母国語は英語でないのに、英語を流暢に話すことができるのかということだ。すると、その子の国では小学生のころから授業が英語で行われるため、みんな自然と英語を話せるようになるということが分かった。また、その他にも小学校から英語で授業が行われている国があることを知り、驚いた。日本では、英語で授業が行われるなんてことは考えられないからだ。現在日本では、小学五年生から外国語活動が始まり、中学校から教科として外国語科の授業が行われる。といってもレベルの高い授業ではなく、身近なアルファベットから慣れていくところから始まる授業である。2020年からは小学校学習指導要領の改訂により、小学三年生から外国語活動、小学五年生から外国語科の授業が行われることになる。それでも他国の英語教育のレベルには達さない。なぜ日本の英語教育は諸外国に対して比較的遅れているのか気になった。教育について学んでいる学生として、この点について探求してみたいと思う。

また、留学期間中、自分自身の英語力が周りより低く、自分が思っていることを英語で言えず、わかっているにもかかわらず英語にすることができずに会話の途中で沈黙になったりして悔しい思いをした。そこで、英語を母国語としない国の人たちにどうやって英語を上達させたか聞いてみた。すると、どの人も、繰り返し英語を使って英語を使う練習をすることが大事だということを教えてくれた。日本では英語を使う機会がほとんどなく、自分から積極的に動かない限り英語を使う機会は訪れない。だから、今回の

留学が貴重な機会だと思い、文法の間違いはあまり気にせず、そのことを思い出して自分から積極的に話しかけることを意識して頑張った。

私はもう一つこの二週間を通して考えたことがもう一つある。それは、日本人は他国のこと、世界のことについての知識が全然ないということである。複数人で話して他国の話題になると話が分からなくなることがあった。その国の文化や歴史など、知っていることがほとんどなく、中には国の位置も分からない国もあって、話を広げることができなかった。さらに、日本人は日本についてもあまりわかっていないことも痛感させられた。例えば、浴衣を着たときに着方を間違っていてそれを他の国の人に指摘されたり、建国記念日はいつか聞かれたときに答えられなかったりした。また、いろいろな国の人から日本の文化やアニメのことについてたくさん質問をされたとき、私自身、日本の文化やアニメについて簡単なことしかわからず、その意味を問われる時や、アニメの内容の話になると口籠ることが多々あった。自分の国のことなのに知らないことがたくさんあって、それを他国の人に指摘されてしまうのはとても恥ずかしいことだと感じた。たとえば普段浴衣を着なくても、アニメについて詳しくなくても、外国人に説明できるくらいの知識は持っておかないといけないと思った。

今回、インドネシアに留学したことで様々な体験をしたり、日本と世界の違いや共通点を見つけたりすることができ、自分の将来の視野も広げることができた。自分の語学力が追い付かず気後れしたり、文化の違いに戸惑ったりすることがあったが、インドネシア人チューターさんをはじめ、たくさんの方がいろいろな面で支えてくださり、充実した二週間を送ることができた。私は将来、英語を使った仕事をしたと考えており、これから長期留学も考えている。そのために、これから語学試験への挑戦や、留学生や外国人と交流できる場があれば積極的に参加したりするなど、自分の英語力を高める努力をし、たくさん英語に触れる機会を作りたい。



プロモ山での登山の様子

「たくさんの刺激を受けて」

農学部応用生物科学科 2年 川谷瑠泉

今回のマラン大学プログラムを通して、私は多くの刺激を受け、課題を見つけることができました。

はじめに、絶対に留学すると決めていた高校生だった私は、大学生になった途端、英語の勉強が続かなくなったため、このまま留学しても意味がないと弱気になっていました。しかし、どうしても弱気な自分を変えたくて、とりあえず留学しようと、勢いで参加を申し込みました。そこで、私がこのプログラムを選んだ理由は、多様な国籍の人たちと交流ができ、フィールドトリップやホームステイの体験もできることでした。語学力向上の他にも、様々な人と価値観を共有し、視野を拡大することや、その国の伝統文化だけでなく、日常的な暮らしを知ることができると思ったからです。

このマラン大学プログラムでは、主 UMiCamp と ASEF に参加し、2つのプログラムの間の休暇は自由にインドネシアを満喫することができました。まず、UMiCamp2019 では、多様な国の参加者たちと共に生活しながら、インドネシアの文化などを学びました。その中で私には、色々な外国人と話をするという目標がありました。初めは、同い年の人もいるにもかかわらず、周り全ての人が英語で楽しそう

にコミュニケーションをとっているのを見て、この中に英語が不得意な私が入っても大丈夫なのかと不安でした。しかし、英語が苦手なことを伝えると、ゆっくり話してくれたり、簡単な言い方に変えてくれたり、Try it !!と私が英語で伝えられるまで待ってくれたりしました。さらに、日本では日本語しか話さないし、この子は英語が苦手だからゆっくり話してあげて、という風に他の人に英語で伝えて、フォローしてくれたこともありました。このように、多くの人に優しく接してもらうことで、だんだん不安もなくなり、外国人と話すことへの抵抗が薄れていきました。

また、日本との違いで驚いたことが3つあります。

1つ目は、時間に対する考え方の違いです。日本では、タイムスケジュールが与えられたら、それ通りに動く必要があり、むしろ、5分か10分前行動が当たり前です。しかし、UMiCamp では、時間ぴったりに集合しても誰もいないという事もあったように、時間の流れがとてもゆっくりでした。最初はこれで大丈夫なのかと焦りもありましたが、時間にルーズな私は、このように時間に追われない生活が続けばいいなと思ってしまいました。この時間のルーズさは、寛容な国民性が故なのかもしれないとも考えました。2つ目は、性格の違いです。簡単なインドネシア語講座や、チーム名を決める時、伝統的なゲームをする時など、外国人の主体性の高さに触れ合う機会がたくさんありました。日本では主体性のある人が目立つのに対し、ここでは主体性のない人の方が目立っていました。この点は、日本が外国から学ぶべきことの1つだと思いました。また、みんな優しくかったけど、自分を強く持っているため、あまり自己表現をしないような日本人にとっては、少しきついと思う場面もありました。しかし、謙遜や譲り合いなども大事にしつつ、相手に気を使わずに、もっと自分のことも考えてもいいのではないかと思うようになりました。

3つ目は、日常的な暮らしの違いです。インドネシアのトイレにはトイレットペーパーはなく、シャワーのようなものが付いているだけで、流す方法と

して桶の水をすくって行うタイプもありました。さらに、場所によっては裸足で入る必要がありました。お風呂も、お湯がある所は珍しく、ほとんどの家は、桶に溜めた水で洗い流していました。このように慣れないことが多く、最初はためらいもあったけど、インドネシアらしい特別な経験をすることができました。

これらの他にも、インドネシアにおけるバイクの量が佐賀大学という自転車の量と同じくらい多いこと、ほとんどの料理が甘いか辛いかのどちらかでしかないことなど、様々な違いに気づくことができました。

次に、UMiCamp 後の ASEF では、マラン大学の学生と、お互いの国や地域、大学についてのプレゼンテーションと文化の交流を行いました。私たちのプレゼンテーションでは、日本のアニメキャラクターの絵を少しずつ見せていき、何というキャラクターかを答えてもらうクイズもしました。私たち自身でさえ分からないような、本当にそのキャラクターの端っこの絵を1つ目のヒントとして見せたのにもかかわらず、マラン大学生はすぐ正解してしまいました。マラン大学生の日本に対する関心の強さを知るとともに、私はインドネシアの何を知っているのだろうか、自分の好奇心の低さや視野の狭さを実感するきっかけにもなりました。

また、文化交流の時、私は折り紙を担当して、鶴の折り方を教えました。十数人のマラン大学生に、佐賀大学生1人で教えなければいけなかったのが、頼る人もおらず、とても心細くて本当にできるか不安でした。単語でしか言えなかったり、実際にやってみることでしか伝えられなかったり、とても申し訳ない気持ちになりました。また、Ketupat の容器作りを体験してみて、とても難しくて自分では完成しきれなかったけど、ある学生が完成したものをプレゼントしてくれました。嬉しくてお礼を言いたかったけど、Thank you しか言えず、全体を通して悔しさを感じました。

おわりに、今回私が経験したことや得たことが、いつどこで生きるかはまだ分かりませんが、このプ

ログラムを通して少しでも自分を変えることができたと思います。また、英語の重要性を身を染みて感じることもできたので、本当に参加してよかったです。このモチベーションが下がらないよう、勉強を継続させていきたいです。そして、今回できた外国の友達といつか会うことがあったら、その時は楽しく英語で会話できることを期待しています。



「インドネシアに大集結！世界各国の人々との交流を通して」

経済学部経済学科 鶴本莉々

私は今回の SUSAP・マラン大学プログラムに参加し、約2週間インドネシアで過ごした。インドネシアでの生活は、何もかもが初めてのことばかりで毎日刺激を受ける日々だった。実際に生活する中で様々なことを発見し、考えさせられたので実体験とともに述べていく。

1つ目は、自分の英語力が想像以上に乏しかったこと。世界各国の人々が参加した UMiCamp では参加の申し込みから、実際の会話まで全て英語で行われた。ホテルに宿泊する際、3人で同じ部屋で、自分以外の2人は英語が話せるため、シャワーに入る順番だったり、部屋の鍵をだれが持ち運ぶかだったり、一緒に生活するにあたって必要な会話をスムーズにすることができなくて呆れられることが多かった。また、初めて話す人と自己紹介をした後、お互いの国について紹介するときに、言葉だけではうまく説明ができず、画像を見せながら単語で説明するというように一工夫しなければ伝えることができ

なかった。他にも、自分の発音が悪すぎて通じないことが多々あった。自分では話せているつもりでも相手には伝わらず、スペルを1つずつ言っていると理解してくれ実際に発音してくれた。そこで初めて正しい発音を知ることが多かった。発音が悪くて通じないのは1番悔しかった。日本では小学校から英語教育が始まり大学まで英語を学習するが話せる人はかなり少ない。その理由として進学のために英語を勉強させられているという受け身の人が多いからだと思う。また日本人は英語が話せなくても日本で就職できるだろうと甘く考えている人が多いと感じる。インドネシアでも小学校から英語教育が始まり、話せる人が多い。なぜなら、インドネシアに先進国の技術や研究を持ち帰りインドネシアをもっと発展させたいと思っている人が多いからだ。他の国に留学したり就職したりする時に英語力が必要となってくるから英語を話せるようになるために学習をしている人が多いのだなと考えた。

2つ目は、日本人は消極的すぎるということ。私を含む日本人は英語に自信がないからか、自分から話しかけに行く回数が少なかった。日本人と比べて他の国の人は皆、初めて会ったとは思えないくらいハグや握手でコミュニケーションをとりながら楽しく会話をしていた。私も途中から積極的に話しかけに行くことを意識すると、今まで話してなかった人とも楽しくお話できて、さらに視野を広げることができて、とても幸せだった。消極的だと損だなと思った。日本人は消極的で恥ずかしがり屋でおとなしい人が多い。私はこのインドネシア留学で殻を破ることができたので、帰国後、佐賀大学に来ている留学生を見かけたら積極的に声をかけていこうと決心した。

3つ目は、インドネシアと日本の生活環境の違い。実際に生活してみて、トイレが水洗ではなかったり、お風呂は水をすくって体を洗ったりと驚いた。また、2つの家にホームステイをして、片方の家には温水のシャワーがあり、インドネシア内でも都市部と農村部で差があるということを知った。インドネシアの人にとっては今の暮らしが普通で、もしお風呂や

トイレを改装するにしても高額のため、改装したいと思っている人は少ない。私は日本でしか暮らしたことがなかったので、普通だと思っていたことが、いざ外に出てみると普通ではないことを実感して、もっといろいろな国に行って短期間でも現地の生活をする必要があるなと思った。そして将来は、世界中の全ての国で下水道が整備されるために貢献できる仕事に就きたいと思った。

4つ目は、様々な宗教が共存していること。事前研修で9割のインドネシア人がイスラム教を信仰していると学んだ。女性はヒジャブを身に着けているとイスラム教を信仰しているとすぐ分かる。しかし、UMiCampに参加しているインドネシアの若い女性は、ヒジャブを身に着けていない人が多かった。本人に質問すると、今の時代、信仰の多様化が進んでいて、ヒジャブをつけるかつかないかは本人の自由で、おしゃれしたいから私はヒジャブを身に着けないと言っていて驚いた。また、若い女性にとっておしゃれなヒジャブが流行りで、宗教の決まりを守りながら楽しむこともできるのだなと感じた。私は日本でヒジャブを身に着けている女性を見かけると、人と関わりたくないのかと勝手に思い込み、話しかけないようにしていた。しかし実際は社会的で面白い人ばかりで、思い込みはだめだと思った。またキリスト教を信仰する人の多い村にホームステイに行った際、豚肉を料理に出さないというようにイスラム教を信仰している人への気遣いを見て、多宗教の共存を肌で感じて感動した。

今回の留学を通して、自分の視野が狭かったため日本国内だけしか見ていなかったなと実感したと同時に自分の未熟さを感じた。今まで英語を真剣に取り込んでこなかった自分が腹立たしい。英語を話せたらもっと楽しくお話できたし、日本の魅力をもっと伝えられたのになという様な後悔が残った。この2週間で将来やりたいことを見つけた気がする。これからもっと視野を広げるために、実際に世界各国に行ったり、佐賀大学に来ている留学生にたくさん話しかけたりしていきたい。マラン大学プログラムに参加でき

て本当によかった。この出会いを大切にしていきたい。



UMiCamp プロモ登山 大切な仲間と共に。

「インドネシアで学んだこと」

経済学部経済学科 1年 津留崎豊

私はマラン大学プログラムに参加して様々な国の人々と関わり、インドネシアの歴史や文化に触れることができました。また、自分の英語力の低さにも気付かされました。

今回、私がマラン大学プログラムに参加した理由は英語を使ってコミュニケーションを取り、インドネシアの歴史や文化を肌で感じたかったからです。また、2週間という期間を単なる旅行とは違う短期留学という形で過ごし、多くのことを吸収することで今後の人生の選択肢を増やしたいという思いもありました。

インドネシアでは多くのことに違いを感じましたが、第一に気候の違いに驚きました。インドネシアは日本よりも暑いと考えていましたが、湿度が高くないため、気温は30度を超えていてもあまり汗をかくことはなくとても過ごしやすい気候でした。さらに8月は乾季ということもあり毎日天気も良く雨は一度も降りませんでした。そして次に交通です。インドネシアでは主な移動手段として車とバイクが挙げられますが、バイクの量が日本と比べてかなり多いです。バイクは道のどこでも関係なく走るという印象を受けました。私たちは車に乗って移動

していましたが、右からも左からもバイクが追い越してきます。車との距離も数センチほどでいつ事故が起きてもおかしくないと思いました。また私たちは2週間マランに滞在しましたが、その中で信号機を見かけたのは一か所だけでした。多くの交差点では1人のおじさんが交通整備をしているだけでした。しかしそのような交通事情の中で実際に事故の発生を見ることはなく、人々の譲り合いや思いやりで成り立っているのだと思いました。食べ物は基本的に辛かったです。また、インドネシアでは国民の87%がムスリムということもあり食べられる肉の大半は鶏肉でした。お茶は砂糖を大量に入れるため大変甘かったです。

私たちが参加したUM iCampは様々な国の人々と関わりながらインドネシアの歴史や文化を体験するというものでした。40ヶ国以上もの人々が参加しており、英語でコミュニケーションを取りました。どの国の参加者も英語を母国語とはしていないのですが、私たちとは比べ物にならないくらいの英語力でした。また、英語力だけでなく、コミュニケーションスキルのレベルもかなり高かったと思います。初めて会った時いろいろな人に話しかけてすぐに仲良くなっている姿を見て自分の能力のなさをひしひしと感じさせられました。うまく話せなくても積極的に話しかけようと心掛けていたつもりでしたが、いざ英語で会話している人たちの中に入ると周りの会話を聞いているだけで会話という会話は全くできていませんでした。徐々に自分から会話を始める回数も増えましたが、私が聞き手に回るが多かったです。言いたいことがうまく英語で表せずもどかしく感じました。しかし、私の中で成果もあったと思います。私は英語の勉強で文法を主に学習していましたが、文法よりも単語数のほうが大事だと思いました。もちろん文法も大切ですが、単語を知らないことには伝えたいことを伝えることができませんでした。単語力の重要性を再確認できたことは今後の勉強の仕方に役立つと思いました。



ブromo山でUM iCampの参加者と撮影

私はインドネシア語も学びました。簡単な自己紹介やあいさつ程度のものでしたが、ショッピングモールやホームステイ先の方々にインドネシア語を使うと喜んでくれました。ホームステイ先のお母さんは英語を話すことができないのでインドネシア人チューターに通訳してもらいました。村の暮らしや伝統的なことをもっと聞きたかったですし、伝えたいこともたくさんありましたが直接伝えられないことがとても辛かったです。やはり他国の歴史や文化を深く知るにはその国の言語を習得する必要があるなと感じました。私は今英語を主に学習していますがインドネシア語も学んでみたいと思うようになりました。

私が訪れた2週間の中には独立記念日も含まれており、町のいたるところでインドネシアの国旗を目にしました。独立記念日当日はお祭りや式典も開かれ、町中が盛り上がっていました。これは聞いた話ですがインドネシアでは多くの結婚式が8月に挙げられるそうです。インドネシアにとっていかに独立記念日が重要であるかが分かりました。日本も支配した側として忘れてはいけなと感じました。

今回の留学で普段から英語を話すことが英語力を上げるためには必要だと感じました。自信が無くても積極的に話していくことで英語に慣れていくと思います。この2週間で身についた英語を話す習慣を無駄にすることなく、今後もこのプログラムで出会えたみんなと会話を続けていこうと思います。今回の留学は今後の学習のモチベーションがあがる素晴らしい留学になったと思います。また機会があれば参加し、将来の自分を作っていきたいです。

「忘れられない夏」

経済学部経済学科一年 平田隆聖

私がこのマラン大学プログラムに参加した理由は二つあります。一つ目は英語でのディスカッションやフィールドトリップなどを通して、日本ではあまり体験できない英語で会話する経験をしたかったからです。実際にプログラムが始まるとすべての活動は英語で行われ、一日中英語だけで会話するという生活になりました。最初のほうは相手の英語がうまく聞き取れず戸惑ったり、常に集中していないといけなためとても疲れたりしていましたが、後半のほうになると段々慣れてきて最初のほうに比べると英語での会話が上達したという風に感じました。

二つ目はこのプログラムは色々な国の人が集まるプログラムだったからです。40カ国から参加者が集まり、たくさんの人たちと交流することができました。インドネシアの文化を学んだことはもちろん、参加者と話をしていく中で色々な国についても学ぶことができました。様々な国から来た参加者と話していて感じたことは皆自分の国に誇りを持っているということです。また、彼らは日本という国についても多くのことを知っており、またとても興味を持っていました。「日本にいつか行ってみたいんだ」と言ってくれる人もたくさんいて日本という国の素晴らしさを再確認することにもつながりました。

このマラン大学プログラムでは人生で初体験のことがたくさんありました。登山をしたのも、ボートに乗って島へ行ったのもインドネシアの伝統的な衣装を着て踊ったのも、田んぼの中に入って泥だらけになって遊んだのも初めての体験でした。また、私はこのプログラムで忘れられない体験をしました。それは参加者の前で英語の歌を歌ったことです。ビーチでキャンプファイアーをしたときにダンスパフォーマンスやゲームがありました。その中で歌いました。日本語であっても大勢の前で歌を一人で歌うことは緊張しますが、それを違う国の人の中で、

英語で歌うというのはとても勇気のいることでした。しかし、歌い終わってみるとたくさんの人から「いい声だね」「発音がきれいだね」などの言葉をもらい、とてもうれしかったと同時に自信が持てるようになりました。この体験は私がマラン大学プログラムに体験したことの中で最も忘れられないことのひとつです。

また、インドネシアで二週間生活すると、日本との違いに衝撃を受けることがたくさんありました。まず、トイレとバスルームです。トイレに基本的にトイレットペーパーはなく、流し方も桶で水をすくってそれで流すというものでした。バスルームも同様にシャワーなどはなく、水が張ってありそれを桶ですくって体を洗い流すというものでした。もちろんお湯はありません。最初は日本とのあまりの違いに驚き、抵抗がありましたが二週間生活する中で徐々に慣れていきました。次に、食べ物です。インドネシアの食べ物は日本と味付けなどや食材なども大きく異なります。お茶がものすごく甘かったり、おかずが辛かったりなどです。自分自身、好き嫌いほとんどありませんでしたが辛い物だけはどうしても苦手な日本で食べることはありませんでした。しかし、どんな環境でも適応できる人間になろうと思いインドネシアで出されたものは何でも食べました。最初は辛い食べ物には苦戦しましたが、最終的には自分の辛い物嫌いを克服することができました。また、ホームステイ先で沢山のインドネシアの伝統料理を食べさせていただきました。正直、初めて食べるものばかりで慣れない味もありましたが、おいしいという風に伝えると、とてもうれしそうなる表情をしてくれました。その時に、異文化を受け入れるということはこういうことなのだなという風に感じました。

そして色々な国の人たちと関わってみて一番驚いたことは、英語を話せるのが当たり前だということです。ほかの国では小学校から授業が英語で行われているということもあり、英語の能力が非常に高いなということを感じました。それと同時に自分の英語でのコミュニケーション能力の未熟さにも気

づかされました。さらに、このプログラムに参加した人たちは自分の国の言語、英語、さらにもう一つやもう二つの言語を話せる人も多くいました。それを受けて自分もこれから英語の勉強をさらに続けていくことはもちろん、第三言語を習得することにも挑戦したいと思うことができました。普段、日本で生活していると英語を使う機会も非常に少ないですがこのプログラムに参加してみて、他の国の人と交流することの楽しさを知ることができ、これからの英語学習のモチベーションにもなりました。今回インドネシアで学んだことを学んでことを忘れずに、これからの大学生活、学習に役立てていきたいです。

